

# とき 時空をこえて 貴重書の世界

初めて世界一周した日本人  
—環海異聞—

寛政5(1793)11月27日、若宮丸は石巻港から仙台藩御用米を積んで江戸へ向け出発した。乗組員は16人。当時蝦夷地は、ロシアの南下によって緊迫していた。船は塩屋崎沖(いわき市)に差しかけたとき暴風雨に巻き込まれ舵を失い漂流、半年間の漂流の末アリューシャン列島に上陸した。異国生活の中である者は異国の土に化し、ある者は帰化した。12年後レザノフに連れられて長崎に帰国したのは4人。江戸で藩主周宗に謁見した後、大槻玄沢に審問され、その後、それぞれの郷里寒風沢、室浜に向かった。結果として4人は初めて世界一周した日本人となったのである。

大槻玄沢は、その聞き書きしたものに自身の博識な知見を補充して『環海異聞』として取りまとめた。これは当時のロシアの生活・文化を知るうえで大変貴重な資料である。



本館所蔵『環海異聞』より

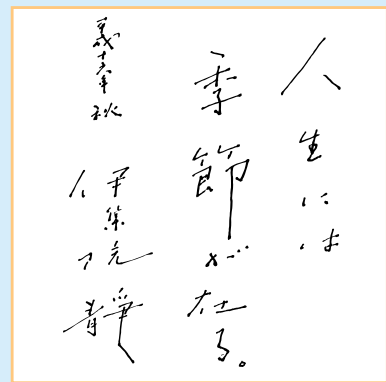
## 読書推進講演会

講師・作家 伊集院静氏

平成16年11月13日、本館2階ホール養賢堂で、仙台市在住の直木賞作家・伊集院静氏をお招きして講演会を開催しました。これは昨年度より宮城県ゆかりの文学者に、本をテーマに講演していただき、多くの皆さまに読書の大切さを再認識していただく機会になればと開催しています。当日は約350人の聴衆を前に、『本を書く、本を読む』という演題で1時間ほどお話しをしていただきました。

本を読むということについては、「読書というものは最後のページを閉じた時に、かわいそうな話だった、読んだら元気が出た、というような読んだ後に何があるか、ということが一番大切なのではないと考えています。もちろん読み切ることは大事ですが、読むという作業を続けていくのに、例えば今日は半ページしか読むことができなかつたとしても、実はその半ページを読書した時間、本にきちんとした向かい方をした時間こそ一番大事なことなのです。」と話されました。その理由は、以下の書く側からのお話しかるうことができます。「本を書くということは、結論のために書いているのではなく、一行一行を重ねていく作業のことであり、その作業の中に大事なものがあつたのです。小説はくこの一行、と

いう一文があれば他は目をつぶれ」と言われる方もいます。一行一行書き綴っていきますが、くこの一行のために他の一行一行を書いているわけではありません。おぼろにある小説の行方、到達点のようなものを、暗い海で灯台を探すように一行一行を重ねていきます。書いている時はくこの一行は見えていないかもしれません。書き終えてからどうもこの一行らしい、と思ったりします。だから書いている側は何の変哲もない半ページに何時間、場合によっては何年という時間を費やして、その作家の魂が込められているのです。」他にも、伊集院氏の自伝的小説『海峡』と重なる幼少時代の思い出や、伊集院氏だからこそ聞ける米大リーグヤンキースの松井秀喜選手とのエピソードなども飛び出しました。仙台に移り住んでからの率直な感想など、時には冗談を交えながらのお話しに、来場された皆さんも笑顔で聞き入り、とても楽しい講演会となりました。



### 表紙エッセイ／熊谷達也さん



くまがい・たつや。作家。1958年仙台市生まれ。中学校教員、保険代理店業を経て、1997年『ウエンカムイの爪』(集英社)で第10回小説すばる新人賞を受賞し作家に専念。2000年『漂白の牙』(集英社)で第19回新田次郎賞受賞。2004年『邂逅の森』(文藝春秋)で第17回山本周五郎賞と第131回直木賞のダブル受賞。近刊に『モビィ・ドール』(集英社)などがある。

## ことばのうみ

題字 作家・高田 宏氏

本誌タイトル『ことばのうみ』は、本館第8代館長・大槻文彦編著による日本最初の近代的国語辞典『言海(げんかい)』(1889~1891年刊行)に由来する。

編集・発行 宮城県図書館

第18号 2005年3月発行

〒981-3205 仙台市泉区紫山一丁目1番地1  
TEL 022-377-8441(代表) FAX 022-377-8484  
ホームページ <http://www.pref.miyagi.jp/library/>

デザイン/印刷 (株)仙台共同印刷